

## ミャンマー情勢（三）

令和三年十一月十五日

加藤 淳平

敗戦後の日本、米國に國土を占領せられ、米占領軍により日本人、徹底的洗脳を受く。洗脳の主要目的の一つは、意識を歐米に向はしめ、アジアより引き離すことなれば、現下の令和の世の若き日本人ら、大多数は自らをアジア人と思はず、アジアに親近感を覚えざるらし。韓國と中國は、近傍の厭惡すべき國、タイ、ヴェトナム等の東南アジアの國々も、遅れたる「途上國」に過ぎず。沉んやミャンマーに於てをや。

されど今より八十年前、日本は今の如く、戦々兢々と、米の意向に沿はんと努むる國にはあらざりき。それどころか往昔の日本は、米のみならず、世界の非歐米諸國を植民地として支配せる、英國等の歐米諸國に一戦を挑み、多くの非歐米諸國、この戦争を契機として、獨立を達成せり。是、日本人が、死力を盡し戦ひたる大東亞戦争なりき。

ミャンマーも、大東亞戦争を契機として、獨立を獲得す。アウンサン・スーチー女史が父、アウンサン將軍以下、この國獨立の志士三十人、日本占領下の海南島にて、日本陸軍が特殊活動従事者養成機關、中野學校の出身者、鈴木敬司大佐より、軍事訓練を受く。

ミャンマー、植民國英の常套手段なりし分割統治政策により、カレン族等の少数民族を、軍人・警察官として、英人の支配を補佐せしめ、多数民族たるビルマ族には、一切の武力を認めざりしかば、ビルマ族たるアウンサン等、軍事訓練には難澁せりと傳ふ。

アウンサン等軍事訓練を受け、「ビルマ獨立義勇軍」、後の「ビルマ國民軍」を結成せり。大東亞戦争に参加し、日本軍に協力して英國と戦ひ、念願の獨立

を達成す。アウンサン、獨立バーモウ政權の國防相なりき。但し日本敗北の後、戻り來れる英國、ミャンマーの獨立を認めざりしかば、アウンサン等、再び獨立戰爭を戦へど、英、一策を講じ、親日派の一政治家を選びて、之を使喚し、この男が配下に、アウンサンを暗殺せしめたり。

されどアウンサン死後も、同志ら、日本とともに、アウンサンの達成せる獨立がために、戦ひを續け、漸く日本敗北後三年にして、獨立を達成す。アウンサン將軍は「獨立の英雄」として、ミャンマー國民に崇敬せられ、父が故にスーチーが人氣、今も絶大なるは、殊更に言ふを要せざらむ。また國民の間に親日感情強きもこの故なり。

但しスーチー、アウンサン將軍が末子にして、父の死はスーチー二才の時なれば、父の鮮明なる記憶、ありしや否や。母はミャンマーの外交官にして、在インド大使としてニューデリーに赴任し、スーチーはインドにて、英植民地の制度に基づく英語教育を受く。その後は英オックスフォード大學、米ニューヨーク大學、日本の京都大學に學ぶ。

大學に學びつつスーチー、前途を決めかねてありし間に、英、スーチーに接觸し、スーチー、情報機關MI6の一部員との、戀愛關係に陥りて、結婚せるは上に述べ。かくて結婚後のスーチー、英情報機關の影響下に、英が利益のため、利用せらるる駒となれり。

ミャンマーは、獨立後暫くの混亂期を経て、アウンサン將軍の後繼者にして、三十人の志士の一人なるネウイン將軍が、腐敗とは無縁なる軍事獨裁政權の下に、政情安定す。但しネウイン政權は、國の獨立と、印僑・華僑の追放等、植民地的經濟構造の拂拭を優先し、外國資本の進出を認めず、またミャンマー人が、生眞面目にして、營利活動を好まざる習性もありて、國の經濟は停滞す。斯くて地下資源に恵まれ、經濟發展の可能性豊かなりしこの國、隣國々

イの發展に引き離され、東南アジアの最貧國の一つに、數へらるるに至れり。  
斯くて英、スーチーなる駒を溫存しつつ、虎視眈々ミャンマー再進出の機會を  
狙ひたり。

(令和三年九月二十七日)